□ 声　楽

國　土　潤　一

2020年に始まった「コロナ禍」も３年目を迎え,「withコロナ」の体制の中での音楽活動が展開される筈だった。少なくとも２月24日のロシアによるウクライナ侵攻が始まるまでは，人類の喫緊の課題はコロナとの戦いだけで，世界秩序の根本的見直しが必要になるなどとは世界中のほとんどの人は思わなかったに違いない。「音楽と政治の関係」についても改めて認識を新たにしなくてはならなくなった。「東京・春・祭」で来日したラトビアのバス･バリトンのエギルス･シリンスのリサイタル（４月１日・東京文化会館小ホール）は，旧ソ連国籍で生まれ，今はドイツで活躍するこの歌手らしく，チャイコフスキー，ラフマニノフ，ムソルグスキーとラトビアの作曲家，シューベルトとR.シュトラウスの歌曲で編み上げられたプログラム。芸術は常に政治下の社会で生み出されるが，政治の変遷を越えて生き残るという「真理」を,シリンスは見事に思い出させてくれた。

２月28日にはソプラノの森川栄子が「現代歌曲の夕べ」を久し振りに開いた（東京オペラシティ・リサイタルホール)。ベルク，ライマン，リームという作品に寄せる共感は，見事な技術に支えられて圧倒的な歌唱を生み出した。凡百の現代音楽を歌う歌手とは次元を異にする歌唱は，もっと多くの人に聴かれるべきものだろう。「B→C」でのソプラノの森野美咲（５月17日・東京オペラシティ・リサイタルホール）も挑戦的なプログラムだった。今後に期待したい。五島記念文化賞オペラ新人賞研修帰国記念のリサイタルを行なったソプラノの竹多倫子（５月20日・東京文化会館小ホール）は，伸びやかな声こそあるが芸術家としての将来は全く未知数。声楽家の評価の難しさがここにある。

声楽のコレペティトゥーアとして日本のオペラ・シーンに足跡を残している前田佳世子が「本業」の作曲家として歌曲とモノオペラのプログラムで「個展」を開いた（６月25日・浜離宮朝日ホール)。岩田達宗が再構成・演出したプログラムで，臼木あい，清水華澄，望月哲也，黒田博の４人の歌手と山中惇史のピアノ。声楽を知り尽くしている強みが，前田の作品には確かにある。岩田達宗の演出に些かの作為性はあったものの，単なる作品の羅列とは違う興味深い演奏会であった。確かな見識と主張を持って音楽活動を展開し続けているピアニストの花岡千春が，ソプラノの小泉恵子とバリトンの末吉利行と共に信時潔の「歌曲の夕べ」を開いた（７月１日・王子ホール)。故畑中良輔の薫陶を受けた３人のエポック・メイキング的な演奏。信時の寡黙で居住いの正しい音楽は，「戦後世代」にとっては精神的に捉え難いものがある。花岡を中心とした音楽作りで３人はこの課題に果敢に挑戦し，見事な成果を獲得した。信時歌曲がこれからも生き残るためには，この挑戦する姿勢が不可欠のものであろう。３人の奮闘に拍手。第72回文化庁芸術選奨文部科学大臣賞を受賞したバスの妻屋秀和のリサイタルは，プログラムを変更してのもの（７月23日・びわ湖ホール小ホール)。ドイツ・リート中心のプログラムをオペラ・アリアに変更せざるを得なかったのも,「コロナ禍」と無縁ではないそうだ。外国人歌手の来日中止が相次ぎ，それらの代役の数々を引き受けざるを得なくなった妻屋は，リサイタルの準備の時間が足りなくなってしまったのだ。プログラムを変更してのリサイタルは，しかし，充実した内容のものであった。ピアノを担当した木下志寿子は寡聞にして初めて聴いたが，オペラの何たるかを知り尽くしたとしか思えないサポートぶりは，大きな驚きと喜びを与えてくれた。こんな優れた人財がいたのは感激だ。リート・デュオと名乗って独自の活動を展開しているソプラノの長島剛子とピアノの梅本実は,「H.ヴォルフとその後」と題して，熟考されたプログラムを聴かせた（10月27日・東京文化会館小ホール)。ロマン派から近現代のドイツ・リートのプログラムを探求する年１回のリサイタルを20年以上も続けてくるというのは，尋常ならざる努力と執念がなければ不可能だ。歌曲という数分の単品を組み合わせてひとつの演奏会のプログラムを織り上げるという作業は，歌曲集を歌い上げるのとはまた異なる工夫と努力が求められる。息切れせずに精進を続けて欲しい。年末に声楽共演ピアニストとして旺盛な活動を行なっている朴令鈴から，２つのコンサートのご招待が来た。ひとつは，メッツォ・ソプラノの花房英里子とバリトンの小林啓倫という若手を擁してのマーラーの「少年の魔法の角笛」(11月29日・Hakuju Hall)。音楽的なリーダーシップは朴にあるのだろう。松村真依子のチャーミングな絵を荒井雄貴がプロジェクションマッピングしたものを使った舞台（塙翔平・コーディネーター）が，或る種の歌手の「若さ」を補って魅力的な時空を作り出した。朴のピアノの雄弁さは見事。もうひとつは「歌曲ガラ・コンサート～七つの国の歌・博覧会」と題したもの（12月22日・Hakuju　Hall)。盛田麻央によるフランス歌曲，松島理紗によるオーストリア歌曲，ジョン・ハオによる中国歌曲，関定子による日本歌曲，彌勒忠史によるイタリア・バロック歌曲，井上雅人によるフィンランド歌曲，塩田美奈子によるスペイン歌曲を朴と鳥井俊之が伴奏した。こちらのピアノは文字通り「伴奏」で，主体は歌手にあった。必然的に歌手の出来不出来が演奏に直結していた。自分の演奏の客観性が声楽家ほどに保ち難い音楽のジャンルはない。ピアニストがそんな声楽家のその時の課題・問題点にどう関わるか，関われる関係かは，演奏の現場につきまとう課題でもある。日本でこれだけ多彩な言語の作品を演奏できるようになった「進歩」と,「声楽界の今も脱却できない因習」の双方を改めて感じた。詩人，作曲家，声楽家，邦楽演奏家を会員とする日本歌曲協会は，今年も２回の「邦楽器と共に」のコンサートを行なった（４月28日・渋谷区文化総合センター大和田さくらホール，10月28日・東京文化会館小ホール)。こういう継続的な活動から，日本の財産となる作品が生まれてくることを期待したい。

内田光子がマーク･パドモアと共にシューベルトの「冬の旅」(11月19日）とベートーヴェンの「遙かな恋人に寄す」他やシューベルトの「白鳥の歌」(11月24日・共に東京オペラシティ）を演奏した。パドモアは発声･発音共に余り感心しなかったが，内田のピアノは空前絶後の圧倒的名演。以前，イアン・ボストリッジと共に内田が行なった「美しき水車小屋の娘」と「冬の旅」以上のこの完璧なピアノ・パートを，どれだけのドイツ・リートに関わる声楽家とピアニスト，声楽教師は聴いただろうか？日本の音楽家のかなりの人達が「素晴らしい演奏の場」に接していないのではないか？このことが持つ問題点は，もっと真剣に考えるべきかもしれない。